

地下鉄日比谷線ひびや

は中目黒駅から地上に出て、渋谷から

の東横線に乗り入れる。瀬木昌平せき しょうへいは、窓の外に広がる中目黒駅周辺の風景を見やった。昌平にとって20年ぶりの東京であった。ずいぶん変わりはしたもののところどころに見覚えのある建物がある。昌平が恵子と数回行った「中目黒シネマ」の看板も見えた。恵子との待ち合わせによく利用した駅前の喫茶店「ルノール」は、今ではガラス張りの大きなビルの2階におさまっていた。恵子と二人でよくボートに乗った公園はここからは見えないうが、今でも変わらずにあるのに違いない。20年前学生だった昌平は、この町に2年間住んでいたのだった。そしてこの町のあらゆる場所がかつての恋人恵子との思い出に満ちていた。

「分かったわ。別れてあげるわ。」

最後に会った時、恵子はそう言った。昌平が最初に別れ話を切り出してから数回目のことだった。

「そのかわり一つだけお願いがあるの。」

あなたがこれまで大事にしていたものを私にちょうだい。なるべく肌身離さず持っていたものがいいわ。だからあなたがおばあさんから貰ったっていうお守り。あれを私に貰えないかしら。」

「ああ、それはいいけどそんなもの何にするんだい。」  
「・・・チベットのスワラジの秘法というのがあるね。」

その秘法ほくとしを施すと、その人にとってどうしても忘れられない人を忘れられるっていうの。それに使うのよ。」

恵子は、そう言った。昔から、占うらないや魔術の方面のことが好きな女だった。

「私にとってあなたと別れる事は本当につらいわ。でもあなたを思い出す事はもっとつらいと思うの。だからあなたを二度と思い出さないようにしたいのよ。」

恵子は思いつめたような表情でそう言った。あやしげな魔術を信じ込んでいる女の心根こころねがいじらしくあわれに思えた。

昌平はそうした20年も前の出来事を、つい昨日の事であるかのように思い出していた。電車はいつのまにか中目黒の駅を過ぎ、次の駅に着いていた。

電車のドアが開き、数人の集団がにぎやかに乗り込んで来た。小学校の保護者会か何かの帰りであろうか、小学おほ生が数人とその母親と思しき女性が2、3人、空席を見つけて座った。小学生は小学生同士で、母親は母親同士で口々に何事かを語り合っている。昌平は母親の声に何か懐かしい声なつを聞いたような気がして、そちらを見やつた。そしてあまりの偶然に思わず声をのんだ。そこにいたのは恵子だった。さすがに20年という歳月

は、彼女を年相応へんぱうの女性に変貌させてはいたが、黒目が

ちの目や、相手を思わずなごませるような屈託のない笑顔などは昔のままだった。昌平は相手がこちらに気付くように少し座席をずらすと、さりげなく恵子と視線を合わせた。

「……」

恵子は確かに昌平を見たはずだった。それなのに何の反応も示さなかった。そのまま視線を戻すと、隣の女性との会話に戻っていた。

斜め前に座っている男性が昌平だったことを分からなか

おおげさ

ったのかもしれない。昌平は今度はちよつと大袈裟に体を揺らして、咳払いをし母親たちの注目をひいてから、まじまじと恵子の目を見つめた。恵子は今度ははつきりと昌平の存在を意識した。二人は1秒間はお互いを見つめあった。ところが今度は恵子はちよつと眉をひそめてから、完全に首を隣の女性の方に向け直し、また二人の間の会話を続けた。それは知っているのにあわてて知らない振りをしているようなそぶりではなかった。明らかに「まったく知らない他人」に対する態度だった。

あの魔術が効いたのだ！。昌平は心の中で叫んだ。

「だからあなたを二度と思い出さないようにしたいのよ

のうりよみがえ

……。」恵子の言葉がもう一度昌平の脳裏に蘇った。突然、新たな恐怖が昌平を襲った。あの時、恵子が言ったことにはまだ先があったのだ。

「ただし、覚えておいてね。その魔術はすごく強力なの。それが5年先のことか、10年先のことか分からないけ

ど私があなただを完全に忘れられたら、その時はその日から3年以内にあなた自身がこの世から存在しなくなるのよ。でもそうなくても私はもう悲しくなんかならないんだわ。だって、その時には私はもうあなたの事を忘れてるんですものね。」

恵子はそう言って、謎のような微笑を浮かべたのだった。あの時、昌平はそれで恵子の気がすむのならと、身に着けていたお守りを恵子に渡した。まさか本当にそんな魔術が効くとは思ひもなかったからだ。

しかしその恵子が今では昌平の事を完全に忘れてしまっている。と、いうことは……。昌平は

そういえば最近何かの拍子に胸がきりきりと痛む事があるのを思い出していた。ここ1〜2年は仕事が忙しくて健康診断も満足に受けていなかった。急に息までが苦しくなってきた。電車が次の駅に着いて昌平はよろめくようにして電車から降りた。早く仕事をすませて医者のところに行かなくては。そのことだけが昌平の頭の中でぐるぐる回っていた。

「はい、これがレントゲンの結果です。まったく異常はありません。まあちょっと仕事が続くと心臓に負担がかかって、胸が痛いような気がするところがあるかもしれませんが、年齢を考えると無理もないことでしょう。まあ、まったくの健康体と言っていいですな。」

人の良さそうな医師はそう言って診断結果を昌平に手

渡した。昌平は東京での仕事が終わって九州に帰ると、その足で知り合いの医師のところへ駆け付けたのだった。この医師には日頃から、もし悪い結果が出た場合でも必ず自分に真実を告げてくれるように言っていた。その医師がいうのだから間違いはなかった。そして昌平にとってもその結果はそれほど意外なものではなかった。

その後、時間が経つにつれて昌平も冷静さを取り戻していた。そして一つの事実を思い出していた。恵子には本当に顔もそっくり、声もそっくりの弘子という双子の姉がいた。その姉と昌平が顔を合わせたのはほんの1回きりだった。それも、何かの折りにただ軽くあいさつをしただけだった。昌平は写真が嫌いで、二人で写った写真なども1枚もなかった。それならば、その姉が昌平を見て、妹がかつてつきあっていた男だと分からなかったのも無理はなかった。あの電車の中の女性はその姉の方だったのだ。昌平は一時的であるにせよ、あんな魔術を信じた自分の馬鹿さに思わず苦笑しながら、足取りも軽く病院を出た。

外はあたたかな陽気で、そろそろ梅もほころび始めている。春には笑顔がよく似合う。昌平は、誰かの詩にあったそんな言葉を思い出していた。

と、その時、折ありからの突風とつぱうにあおられて、昌平の持っていた紙封筒がひらひらと宙に舞った。昌平は思わずそれを追いかけて2、3歩道の中央に足を踏み出した。

キキキー・・・！。

後ろの方から全速力で走ってきた大型トラックは、突然

道の中央に出てきた男の人影にあわてて急ブレーキを踏んだが、とても間に合わなかった。トラックと人間がぶつかりと人間の方は一たまりもない。

男はほぼ即死の状態だった。